

③ れてきたのだろうか。

メディア上に氾濫する大阪像については、特にその画一性・定型性に対する批判も提出されてきた。近世文化の研究者であり、雑誌「上方芸能」の編集長を長く務めた木津川計もその一人である。「単一の ii ではとらえきれない複雑な様相」を大阪の文化に見出す木津川は、それを「都市的華麗な宝塚型文化」「土着的庶民性の河内型文化」「伝統的大阪らしさをたたえも船場型文化」の混在として説明する（木津川 1986: 286）。例えば、モダンで華やかな宝塚歌劇、漫才・落語・浪曲などの大衆芸能、そして文楽や上方歌舞伎といった伝統芸能まで、大阪には実に多様なジャンルの芸能が ④ ている。こうした多面性・多様性こそが大阪文化の特色であるともいえるはずだが、現在流通している大阪イメージは、そうした「複雑な様相」を ⑤ ことで成立している。

では、なぜ画一化・定型化が生じたのか。これについて木津川は、一九六〇年代、七〇年代、そして八〇年代の三度、大阪を「文化のテロル」が襲い、その結果「三類型の一つではない河内型文化で大阪文化を代表させられた」ことが画一化の要因だと語っている（木津川 1986: 291）。そして六〇年代代この「文化のテロル」の発端をひらいた主犯として名指しで批判されているのが、直木賞作家の今東光である。「一人のボヘミアンがふらりとやってきた大阪で、文学による文化のテロルを加えた」と

⑥ 木津川は、次のように書いている。

実際、一九六〇年代、河内の柄の悪さは今東光によるペンの量産で「天下に知れ渡った」のである。大阪文化三類型の一つでしかないのに、すべてを代表する形で「河内ものシリーズ」が喧伝された。一面的なものの全面化であった。

船場型文化は顧みられず、宝塚型文化への注視はなく、猥雑ばかりが氾濫したから河内はいうに及ばず、巻き込まれて大阪も猥雑な都市のイメージで一色に塗りつぶされた格好になった。（木津川 1986: 282）

このように、大阪の都市イメージが「河内型文化」のみに代表させられた契機を今東光の活躍に求める木津川は、「今東光の『河内シリーズ』のはずが、他府県の人たちの目にはすべて『大阪シリーズ』と映った」がために、「河内型の文化ばかりが大阪を覆っている、そんなイメージが形成されていった」のだと主張している。（1）

こうした見方は、ひとり木津川だけにとどまるものではなく、関西圏全般の文化に造詣が深い井上章一も同様の見解を示している。東京と大阪のマスメディアによる共犯関係を通じて「紋切型の大阪像がつくられて」きたとする井上は、「下劣で助平という今東光の河内像」が「阪像と混同」されたとし、「大阪像の変容を、今東光作監があとおとした可能性は高い」と述べている（井上 2018: 228, 230）。（2）

木津川、井上の両者に共通しているのは次のようなストーリーである。まず、今東光の一連の作品群によって、八尾を中心とする河内地域の「猥雑な都市」が全国に知れ渡った。そしてその過程において、「河内」と「大阪」とが「混同」されてしまった結果「猥雑な都市」という「紋切型の大阪像」が流布する事態となった。（河内）による大阪イメージのセンユウ、それが戦後の大阪を襲った「文化のテロル」だったということになる。（3）

今東光の活躍を考えれば、こうした指摘が出てくるのも無理はない。例えば一九六一年から「週刊朝日」に連載された代表作『悪舌』はベストセラーとなっただけでなく、勝新太郎が主演を務めた映画版は全一六作という大映の看板シリーズとして大衆的な支持を集めた。他にも「みみずく説法」や「河内カルメン」「河内風土記」など、戦後の今は多くのヒット作を生み出し、そこに描かれた「河内」の姿が大阪イメージに多大な影響を与えたことは疑いがない。（4）

ただしその具体的な様態については、検討の余地がある。先にみた「混同」という iii には、「河内」とは明確に切り離されうる、確固としたリンクカクを持った「大阪」像の存在が暗黙のうちに前提とされている。なぜなら「混同」が生じるためには、「河内」と「大阪」との間に明白な差異がなければならないからだ。しかし、そのような安定した大阪イメージが当時成立していたかについては、疑問が残る。（5）

注目したいのは、今東光が活躍を始めた一九五〇年代後半には、彼以外にもさまざまな作家たちが大阪という土地を舞台とする

作品を発表していたという事実である。特に山崎豊子の『暖簾』『花のれん』といった大阪商人ものや、菊田一夫の戯曲「がめついい奴」や『がしんたれ』、さらに「やりくりアパート」や「番頭はん」と丁稚どんといった花登笠脚本による在阪テレビ局制作のドラマなどが全国的な人気を獲得しており、当時は「大阪ブーム」とも呼ばれる状況が浮上していたのだ（山崎・岡部・水野 1957）。(6)

例えば『実業の世界』一九五七年四月号の特集「大阪の台所解剖」には「大阪経済を没落させた五ツの実話」「なぜ大阪経済は衰退したか」といった記事が並んでおり、「大阪は我が国経済の心臓都市である」といわれたのは昔のことで、今は戦時、戦後を通じ大阪経済の全国的な比重の後退が目立っている」「とても厳しい現状認識が綴られている。では、近世以来続いていた『商都』という都市像が現実味を失っていくなかで出現した「大阪ブーム」は、どのような「大阪」を描き出したのか。

今東光の諸作品が戦後の大阪イメージに与えた影響を追跡するうえで重視したいのは、こうした同時代的なコンテクストの問題である。A、高度経済成長期に進行していた大阪像の再編という大きな動き、そのIVのなかに今のテクストを位置付けること、またその作業を通じ、戦後大阪と「河内」との関係を考察すること、それを課題とした。

以下ではまず今東光の短篇「關鶏」を分析し、それがどのように河内地域を描いていたかについて、受容の問題を踏まえて確認していく。次に、「船場」を描く作家として今とはほぼ同時期に活躍した山崎豊子と比較対象として取り上げ、「河内」を描くことと「大阪」を描くこととの同時代的な距離を測定する。そのうえで、高度経済成長期に大阪像がどのように変容していったかを確認し、その動的なメカニズムのなかで今の作品が占めていた位置を明らかにしていきたい。

一九九八年に権浜で生まれた今東光は、一九二四年には川端康成・横光利一らとともに「文藝時代」を創刊するなど新感覚派を代表する作家として「口」をあらわし、「軍艦」「文藝時代」一九二四年一月や「瘦せた花嫁」(『婦人公論』一九二五年一月)などで筆名をあげた。その後プロレタリア文学への関心を深め、一九二九年にはプロレタリア作家同盟にも参加したが、一九三〇年に突然の出家を果たし、作家活動は中断されることとなった。

以後約二〇年はほとんど作品を発表していなかったが、一九五一年二月末に天台院の住職として大阪府八尾市に移住したこと

を契機に、河内地域の風土や歴史を題材とした小説を発表し始める。B一九五六年一月から二月まで茶道雑誌『淡交』に連載された歴史小説「お吟さま」が一九五七年一月に第三六回直木賞を受賞すると、同年には「山椒魚」(『東京新聞』夕刊一九五七年三月三日)、「五八年五月二日」(『みみずく説法』『週刊朝日』一九五七年四月一日)、「春泥尼抄」(『週刊サンケイ』一九五七年七月二八日)、「五八年八月〇日」と相次いで作品を連載していった。こうした今のカムバックは広く世間の「八」を引くこととなり、一九五七年末に発表された文壇のハイコ記事でも好意的に取り上げられている(白井・河上・中村 1957)。

C、直木賞受賞作となった「お吟さま」に対する評価は、実はそれほど芳しいものではなかった。当時の評価をみると、「今東光氏の作品としては、それほどすぐれたものとは思えない」(村上 1967)、「お吟さま」自体は、どうみてもすぐれた作品とは言いがたい(白井 1957)といったように、厳しい言葉が並んでいる。では今のカムバックはどのように果たされたのか。それを実質的に支えていたのは、直木賞受賞前後から発表されていた、河内に暮らす市井の人々の風俗を描く短篇群だった。例えば直木賞の選評で小島政二郎は「關鶏」(『中央公論』一九五七年二月号)を引き合いにしたしながら、次のように書いている。

「お吟さま」には、感心しなかつた。どの人間も性格がらつとも書けてあないからだ。こんなもので今東光がはめられては可哀想な気がした。私は委員会に出席する前に、「中央公論」の二月号にのつてゐる「關鶏」に感服してゐた。段違ひにいゝ。この作品で、今東光もいよいよ吹り切れたなと思ひ、はるかに敬意を表した。「關鶏」は、今東光の傑作であるばかりでなく、最近での文壇第一の傑作だと思ふ。(小島 1957: 157)

他にも、「僕は直木賞になつた「お吟さま」は買わない。利休なんかまつたく描けてないし、全体が東光節だよ。しかし「關鶏」の河内あたりの自然と人間を書いている短篇は、おもしろいものだ」「白井・河上・中村 1967)など、小島同様、「關鶏」をはじめとする一連の短篇を高く評価する声は多い。では「最近での文壇第一の傑作」とまで評された「關鶏」が描き出した「河内あた

りの自然と人間」とは、どのようなものであったのか。

八尾市の河内山本地区周辺に伝わる闘鶏賭博を切り口とし、当地に暮す人々の生活を活写したこの小説の末尾には、次のような「作者附記」が置かれている。

しかしながら純粋の闘鶏、若しもこれを賭博といふならば、軍鶏賭博の正統を伝えるべく作者は努力したつもりである。次第に忘れ去られんとする闘技をも併せて、伝統的な鶏合せと共に、その郷土色をも本篇によつて多少でも伝えることが出来れば、作者は望外の欣喜としなければならぬ。(今 1957 a : 382)

ここで「軍鶏賭博の正統を伝えるべく作者は努力した」と書かれているように、小説には「河内奴」や「狸々赤」など軍鶏の品種名やその特徴、さらに「やり越し」や「下り藤」といった技法の種類に至るまで過剰なほどに詳細な説明がなされており、河内地域の闘鶏に関する [v] 的な性格も併せて持っている。 [d]、その「伝統的な鶏合せと共に」伝えることが目指された「郷土色」とは、どのようなものであったのか。

小説の主人公は中学生の仁吉という少年で、物語前半では「人間の子供と遊ぶよりシャモと暮す時間の方が多かった」というほど闘鶏にのめり込む彼の姿が描かれている。「シャモ吉」というあだ名を持つ仁吉にとって、軍鶏を育てることは単なる遊びや趣味にとどまるものではない。この小説では、「父祖の代からの伝承」により河内の人々に受け継がれてきた闘鶏は「学校」にさえ代わるもの、すなわち [x] を理解する一つの「知」の枠組みというべき位置を与えられているのである。ある日、学校にも行かず軍鶏の飼育に明け暮れている仁吉に対し、近所の老人が以下のように注意を与える。

倉平爺さんは古い材木に腰かけたまま、ゆつくりと煙草をくゆらせながら、軍鶏と仁吉の伸び加減の頭を見やつて、

「そろ。さうと。われ。中学校へいけへんのか。よオ」
と質ねた。

「新制中学か。あんなもん」
仁吉は鼻であしらった。

「あんなもんで。われ。何ちふことぬかすんぢや。新制いうたら、われ、義務教育やないけ。あんまり、おとな騨りせんことぢや。夜、小便たれんどオ。学校へも行さざらさんと軍鶏はつかりなつてたら」

「そない云うたかくて、おっさん、学校あかんね。先生のくせさうして、軍鶏のこと、よう知りよれへん。まだ、こちらの親父の方、よう知つとんが」

「阿保助めが。どこの学校で、鳥博奕のこと教へるか。こいつばつかりは、月謝 高うつく……………」(今 1957 a : 382)

ここで注目したいのは、「中学校へいけへんのか」という問いかけに対し、仁吉がわざわざ「新制中学か」と言い直したうえで、「あんなもん」と一笑に付していることである。占領期の教育民主化のイッカンとして導入された六三三制は当時、「将来文化国家として立つのだ」という唯一の希望を与えてくれるもの、「文化国家日本の建設にとつて大きな命題」と受け止められていた。そしてこの新制度の根幹を担う学校として、「教育基本法の理念のもと、すべての国民に共通で単一な「中等普通教育」を施す機関として登場」したのが新制中学校であった(木村 2005)。しかし、「軍鶏のこと、よう知りよれへん」ような人間は「先生」たりえないと考える仁吉にとって、それは「あんなもん」として切り捨てられてしまう。

[e]、こうした認識を「阿保助」と非難する「倉平爺さん」の言葉は妥当な評といえる。だが「国家及び社会の形成者として必要な資質(学校教育法旧第三六条)を身につけるための教育には「興味も理解も示さず、父祖の代からの伝承」である闘鶏を通じて世界を理解しようとする仁吉の姿勢は、

Y

問一 次の文章は (1) (2) (3) のどの段落の後に入っていたものか、最も適当だと思われるところを選んでマークせよ。
坂堅太「戦後大阪と〈河内〉」山本昭宏編著『河内と船場―メディア文化にみる大阪イメージ―』（ミネルヴァ書房）から

さらに文化的な面以外でも、この時期は「大阪」に対する視線が集まっていた。背景にあったのは、高度経済成長下で進行していた資本の東京一極集中による、大阪経済の地盤沈下という問題である。

問二 空欄 A J E には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ言葉を二度用いてはならない）。

- 1 すなわち 2 そして 3 それでは 4 ただし 5 もちろん

問三 空欄 i j v には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ言葉を二度用いてはならない）。

- 1 ダイナミクス 2 ドキュメント 3 ナラティブ 4 パターン 5 パッチワーク

問四 空欄 ① (6) には、次のどの動詞の活用形を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ（同じ動詞を二度用いてはならない）。

- 1 機能する 2 糾弾する 3 経過する 4 形成する 5 捨象する 6 併存する

問五 空欄 イハ には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ。

- イ——1 狛介孤高 2 笑止千万 3 縦横無尽 4 自由闊達 5 上意下達
ロ——1 手の内 2 頭角 3 名は体 4 馬脚 5 日の目
ハ——1 線 2 耳目 3 袖 4 手綱 5 手ぐすね

問六 傍線 あいか の漢字の読み方をひらがなで書け（送りがなを記してはならない）。

問七 傍線 a d のカタカナと同一の漢字を使うものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- a センユウ——1 セン教師 2 セン拳区 3 セン秋葉 4 セン星術 5 セン天性
b リンカク——1 リン時 2 リン接 3 リン読 4 リン理 5 リン立
c カイコ——1 栄コ盛衰 2 温コ知新 3 頑コ一徹 4 後コの愛い 5 指コの間
d イツカン——1 カン境 2 カン見 3 カン断 4 カン末 5 カン曆

問八 傍線 I I V の本文中の意味に最も近いものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- I ステレオタイプ——1 仮象 2 形象 3 象徴 4 雛型 5 類型
II 守銭取——1 金満家 2 健康家 3 好事家 4 辣腕家 5 吝嗇家
III コンテクスト——1 語彙 2 情況 3 典拠 4 論題 5 話法
IV 切り口——1 係争点 2 結節点 3 出发点 4 着眼点 5 分岐点

問九 空欄 X には、どのような言葉を入れるのが適当か。本文より二字の言葉を抜き出して記せ。

問十 空欄 Y には、次のどれを入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせよ。

- 1 「義務教育」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を絶対化するものでもある
- 2 「義務教育」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を相対化するものでもある
- 3 「新制中学」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を絶対化するものでもある
- 4 「新制中学」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を相対化するものでもある
- 5 「文化国家」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を絶対化するものでもある
- 6 「文化国家」を指すのが当然であるという戦後日本の「常識」を相対化するものでもある

問十一 本文の内容と異なるもの一つ選んでマークせよ。

- 1 大阪という街は、文化の優越性という点で他の地域にはない特権的な位置を与えられている。
- 2 芸能や文化の多様性があるにもかかわらず、現在の大阪イメージは一面的なものになっているという批判がなされる。
- 3 今東光は「關鷄」をはじめとして、河内地域の風土を題材とした小説を複数著している。
- 4 「九五〇年代後半の「大阪ブーム」とも呼ばれる状況の中にありながら、大阪の経済は衰退を迎えていた。
- 5 メディアでの大阪文化の取り上げられ方は、型にはまった一様なものになっているという批判もされた。
- 6 物語の中で大阪弁は、話者の特徴を表す役割語としての働きを強く備えている。